

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 26 日現在

機関番号：32686  
研究種目：基盤研究(C)（一般）  
研究期間：2020～2023  
課題番号：20K00350  
研究課題名（和文）文化冷戦期ソフトパワーのもとにおける日本文学の国際化と変容をめぐる包括的研究  
  
研究課題名（英文）A Comprehensive Study on Globalization and Transformation of Japanese Literature: In Relation to Soft Power during the Cold War  
  
研究代表者  
志賀 賢子（川崎賢子）（KAWASAKI, Kenko）  
  
立教大学・文学部・特定課題研究員  
  
研究者番号：40628046  
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：戦前戦中の内務省検閲、GHQ占領期における非公然組織CCD(Civil Censorship Detachment民事検閲局)と公然組織CIE(Civil Information and Education Section民間情報教育局)を両輪とするメディア政策は、占領終了後、冷戦期に至って、米国の財団などによる民間外交・広報外交に再編され、日本文学者への働きかけは助成・招聘などに形を変えた。本研究は、この文化冷戦期における日本文学の国際化の偏りと変容について、特に日本文学者のアメリカ体験と親密圏の表象の変化に注目しつつ、調査研究を行った。

## 研究成果の学術的意義や社会的意義

文化冷戦期における日米のメディア政策の変容とこれに対応し、あるときは自主検閲を余儀なくされ、あるときは奨励され、また米国に招聘された、日本文学者の融和と葛藤の諸相に焦点を当てた。冷戦期におけるナショナリズム/トランスナショナリズムが文学においてどのように言説化されたのかを明らかにした。と同時に、ジェンダーの視角から、アメリカ体験および国際化の体験が、家族や性などの親密圏の表象をどのように変えていったのかを明らかにした。第三の新人グループに加えて、有吉佐和子、石井桃子らの女性作家や、松本清張らの大衆文学作家も分析対象とした。

研究成果の概要（英文）： Modern Japanese literature was censored by the Ministry of Home Affairs before and during the Asia-Pacific War. Later, during the GHQ occupation, a media policy was implemented with the CCD (Civil Censorship Detachment) and the CIE (Civil Information and Education Section) as its two main arms. After the end of the occupation and into the Cold War, the U.S. occupation agencies were reorganized into foundations engaged in civilian diplomacy and public diplomacy. The outreach to Japanese literary figures took the form of grants and invitations by U.S. institutions. This study focuses on the bias and transformation of the internationalization of Japanese literature during the Cold War. In particular, we conducted a survey of Japanese literary scholars' experiences in the U.S. and changes in the representation of the intimate sphere. Compromises and conflicts between media policy and representation were revealed.

研究分野：近現代日本文学

キーワード：近現代日本文学 検閲 広報外交 文化冷戦 戦後期 ジェンダー 留学 ポストコロニアル

### 1. 研究開始当初の背景

検閲、プロパガンダ、インテリジェンス(情報戦略)などのメディア政策と文学表現との相関、葛藤についての研究は、アジア・太平洋戦争戦前から戦時下にかけての内務省検閲と文学について、相当の蓄積があった。また、GHQ 占領期における CCD (Civil Censorship Detachment 民事検閲局) による検閲の集積資料体であるプランゲ文庫のデータベース化および検閲と文学についての研究については、小括として、「占領期雑誌資料大系」(岩波書店) 大衆文化編全 5 冊、文学篇全 5 冊が、資料収集と解説解題を通じて成果を公表していた。文化冷戦期のメディア政策と文学に関する研究は、それらの先行研究の蓄積の上に構想されたが、研究開始当初は、冷戦期を、アジア・太平洋戦争期、GHQ 占領期を、通貫する貫戦史ないし貫戦期の流れの中で相対的に位置付けるという視角は、特に日本文学研究においては希薄であった。

GHQ 占領期の米国占領軍の日本に対するメディア政策機関は冷戦期に再編され、あるいは、米国財団主導に委ねられて、その機能は、検閲、奨励・指導から、助成・留学・招聘へと変化した。特に著名な文学者では、評論家の福田恆存、江藤淳、小説家の大岡昇平、阿川弘之、「第三の新人」である小島信夫、安岡章太郎、庄野潤三らに対するロックフェラー財団による米国留学助成が、冷戦期の広報外交と日本文学の関係として知られている。ただし、比較文学研究の対象として、日本文学におけるアメリカ表象の変容について分析対象とする先行研究は存在したが、家族のライフスタイルの変容、ジェンダー、セクシュアリティに関わる親密圏の表象の変容などにはあまり関心が払われなかった。また、冷戦期広報外交の後押しによる米国留学者の中でも、有吉佐和子、石井桃子ら、女性文学者の体験については、見過ごされがちであった。いうまでもなく文化冷戦期は日本国内においては高度経済成長期であり、近代家族が一挙に大衆化した時期である。

また、冷戦期の米国広報外交と日本文学との相関、葛藤について、日米二国間関係にとどまらず、冷戦期東アジアの地政学と文学という布置の中に相対的に位置付ける試みも端緒についたばかりであった。

文化冷戦期は、また国内における大衆文化の膨張期にあたるが、映画、演劇など、ジャンルを跨いでの冷戦期文化の研究は非常に手薄であった。

冷戦末期の 1970 年代には、カウンターカルチャーの視角から、1920 年代 30 年代の日本のモダニズム文学文化の再発見再評価がなされるが、アジア・太平洋戦争、GHQ 占領期を挟んでの持続性、連続性の側面についての研究は現在でも課題として残されている。

### 2. 研究の目的

(1) 検閲、プロパガンダ、インテリジェンス(情報戦略)などのメディア政策と文学表現との相関、葛藤の諸相を、貫戦期の枠組みで、アジア・太平洋戦争から GHQ 占領期へ、そして文化冷戦期へと連続的に分析記述する。

(2) GHQ 占領期から冷戦期に至る日本文学の「国際化」を駆動した要素としてロックフェラー財団など、米国民間財団が担った広報外交(パブリック・ディプロマシー)に注目し、日本文学(者)の冷戦期におけるアメリカ体験を明らかにする。

(3) 冷戦期における日本文学(者)の「国際化」体験と、ジェンダーおよびセクシュアリティ観の変容、女性文学者によるフェミニズム言説、表象の構築を検証する。

(4) 日本近現代文学と、大衆文学・大衆文化(演劇・映画など)諸ジャンルを横断して、冷戦期の「国際化」の諸相を明らかにする。

### 3. 研究の方法

(1) GHQ 占領期前半における米国占領軍によるメディア政策、事前検閲の時期と、占領期後半、朝鮮戦争勃発など冷戦の始まりの時期における事後検閲への移行期との断絶について、プランゲ文庫資料を調査する。20 世紀メディア情報データベースを援用する。

(2) GHQ 占領期のメディア政策において、CCD の検閲と両輪の輪としてはたらいた CIE (Civil Information and Education Section 民間情報教育局) の機能について、占領終了後、どのように再編され、機能が移譲されたかを踏まえ、広報外交の日本文学への働きかけを調査する。

(3) ロックフェラー財団による日本人創作者招聘プログラムについて、データベースから資料を取り寄せ分析する。

(4) 有吉佐和子、石井桃子ら、ロックフェラー財団により米国に招聘された女性文学者、人選に当たった坂西志保らの冷戦期言説について分析する。

(5) 文学者の「国際化」体験およびそれに関する言説と、文学テキストにおけるミクロな変容(親密圏の表象の変容)を分析する。強制的異性愛に基づく近代家族の揺らぎ、そこからの逸脱を分析する。

(6) 日本文学(者)の「国際化」体験が見出した冷戦期のポストコロニアルな状況について分析する。

(7) 日本文学(者)の「国際化」体験が見出した冷戦期のフェミニズムのグローバルな状況について分析する。

(8) 日本文学と映画、演劇など同時代の大衆文化諸ジャンルとを横断的に調査し、冷戦期表象のアダプテーションについて分析する。

#### 4. 研究成果

(1) 2020 年度においては、貫戦期（アジア・太平洋戦争から冷戦期まで）における文学の連続と断絶、ジャンルの横断について主として研究した。

アジア・太平洋戦争下に日本語研究を始め、戦後占領期、冷戦期からポスト冷戦期にかけて日本文学研究者として活躍した、ドナルド・キーンについてエッセイを発表した。「太平洋戦争とドナルド・キーン」展を見て、『20 世紀メディア よもやま話』pp2-3、20 世紀メディア研究所、2020 年 4 月

口頭発表「大陸三部作」の越境—メディア・ジャンル・ジェンダー」、シンポジウム「貫戦期日中映画における表象の越境」於 早稲田大学(zoom) 20 世紀メディア研究所、2020 年 11 月 28 日

大衆文化である漫画において「核」「原子力」体験がどのように語り直され、呼び起こされているかについて以下の論文を発表した。「From Fukushima to Hiroshima :Teaching Social Engagement through Manga」『MANGA! Visual Pop-Culture in ARTS Education』InSEA (International Society for Education through Art) Publications,2020 年 3 月、pp149-157、査読付、国際共著

(2) 2021 年度においては、1920 年代 3 0 年代の日本のモダニズム文学文化と、冷戦期文学文化、およびポスト冷戦期の文学文化について、持続する要素をどのように見出すかについて主として研究した。

小説、映画、舞台のジャンルを横断した、貫戦期における中国表象について、以下の論文を発表した。「大陸三部作」の越境—メディア・ジャンル・ジェンダー」『Intelligence』21 号、20 世紀メディア研究所、pp4-17、2021 年 3 月、査読付

書評として以下を発表した。「書評 岩本憲児・晏妮編『戦時下の映画—日本・東アジア・ドイツ』」『映像学』105 号、日本映像学会、pp100-103、2021 年 3 月、査読付

分担執筆としてモダニズムの雑誌媒体「新青年」、舞台ジャンル「レビュー」ほか、『江戸川乱歩大事典』、勉誠出版、2021 年 3 月を執筆した。

モダニズム文学と現代の前衛短歌との連続 / 不連続に言及して、以下を執筆した。「ドグラ・マグラ」を遠く離れて—水原紫苑と夢野久作の世界」『水原紫苑の世界』、pp25-31、深夜叢書社、2021 年 3 月

学会発表としては、日本近代文学会「外地の鉄道と文学」において、「白蘭の歌」におけるプロパガンダ・メロドラマ・アダプテーション 2021,11,27 での報告を行った。

国際学会において、ディスカッサントを務めた。TCS 国際シンポジウム「メディア化された身体/引き裂かれた表象—東アジア冷戦文化の政治性」於名古屋大学(zoom) 2021 年 1 月 23 日・24 日 オンライン

アジア・太平洋戦争から GHQ 占領期、冷戦期にかけて中国、日本、ハリウッド、香港において越境的に活躍した李香蘭を巡って、以下の報告を行った。「『支那の夜』再検討—李香蘭研究の可能性と課題」、於第 40 回 現代中国研究会、2021 年 3 月 21 日、オンライン

国際学会 EAJS (European Association of Japanese Studies) において、文学における混血表象の分析を行い、報告した。A Detective with 'Mixed-blood' Looks: Transformation of the Detective Genre as a Transcultural Text, from the 1920s to the 1940s PANEL 25th AUGUST 2021、オンライン

国際学会 JSAA(Japanese Studies Association of Australia)において、ロックフェラー財団の日本人創作家招聘プロジェクトにより渡米した安岡章太郎のテキストの家族と「老い」の表象分析を行い、報告した。安岡章太郎「海辺の光景」における父母イメージの変容：老化と動物化 20211001 オンライン

(3) 2022 年度においては、冷戦期における日本文学（者）の「国際化」と戦争体験の語り直しについて、隣接諸ジャンル（文学・映画・演劇）の横断と戦争表象のアダプテーション（翻案）について主として研究した。

小説（石坂洋次郎）映画（今井正監督）で、戦後民主主義を代表する大衆文学大衆文化として受容された「青い山脈」について、戦後民主主義のナラティブ（語り）と表象を分析し、論文を発表した。「Girls (and Boys) Debating Democracy in Aoi sanmyaku」『Japanese Studies』Volume 42, 2022 - Issue 3: Youth and Democracy in Post-War Japanese Culture, Japanese Studies Association of Australia, 2022 年 10 月、査読付、国際共著、pp309-322, DOI <https://doi.org/10.1080/10371397.2022.2134100>

小説（久米正雄）映画（李香蘭・長谷川一夫主演）で、アジア太平洋戦時下のプロパガンダとして機能した『白蘭の歌』について、以下の論文を発表した。久米正雄『白蘭の歌』における満鉄表象とイデオロギー—死角としての愛路運動』『Intelligence』23 号、20 世紀メディア研究所、2023 年 3 月、査読付、pp64-75

ロックフェラー財団に招聘されて渡米した大岡昇平のメロドラマ小説（溝口監督によって映画化）『武蔵野夫人』について、アダプテーションと、占領表象の分析を行い、以下の論文を発表した。分担執筆。『文学研究の扉をひらく—基礎と発展』ひつじ書房、2023 年 2 月

大岡昇平「武蔵野夫人」「インターテクスチュアリティとアダプテーション 言説のネットワーク」pp155-175

招待講演（基調講演）としては国際ワークショップで渡仏し、文化冷戦期における大衆文学（松本清張）の占領表象と、これに対して、ロックフェラー財団に招聘され米国留学から帰国した大岡昇平がどのような批判を行ったかについて、報告した。「近著を語る」パリ・シテ大学、2023年3月17日、「戦後GHQ占領期から冷戦期にかけての「大衆文学」研究の現状と課題」日本文学研究の現在と世界の視野」シンポジウム、フランス国立東洋言語学院、2023年3月18日。

国内の口頭発表では、探偵小説雑誌『宝石』の冷戦期初期における東アジア（中国、香港、台湾）表象を分析し、以下の報告を行った。「『宝石』1948年 移動の表象」公開講座シンポジウム 雑誌『宝石』と戦後日本の探偵小説」2022年9月4日 於立教大学

「日中女性学者文学芸術講座」において、アジア・太平洋戦争期からGHQ占領期、冷戦期（香港、ハリウッド）までを国際派女優として活躍した李香蘭（山口淑子、シャーリー・ヤマグチ）について、以下の報告を行った。「李香蘭の越境を再読する」11月24日、清華大学・中央大学 オンライン

日本モダニズムの一世紀に及ぶ変容に言及して、以下の著作を発表した。『宝塚 変容を続ける「日本モダニズム」』岩波書店 2022年2月 全510ページ

また上記について日本演劇学会の招待で、以下のエッセイを発表した。「自著を語る『宝塚：変容を続ける「日本モダニズム」』」2022年12月『演劇学論集』日本演劇学会紀要 75号、118ページ

- (4) 2023年度においては、GHQ占領期後期／冷戦期初期の連続と断絶について実証的に研究した。口頭発表では、日本のモダニズム研究の理論家でもある南博の占領期後期／冷戦期初期に焦点を当て、以下の報告を行った。「占領期の南博」20世紀メディア研究所、第169回研究会 2023年9月、早稲田大学

上記の口頭発表に加えて、南博の貫戦期を通観し、プランゲ文庫資料、アジア歴史資料センター資料などを加えて分析した。以下の論文を発表した。「占領期の南博—プランゲ文庫資料を中心に」『Intelligence』24号、30-40頁、査読付

占領期から冷戦期にかけて刊行された大衆的な探偵小説雑誌『宝石』の復刻に共編著・解説として携わった。『占領後期『宝石』復刻』、三人社、2023年10月

占領期から冷戦期にかけての関西の探偵小説作家の動向をよく示す資料として、『関西探偵作家クラブ会報』を分析し、解題を執筆した。『『関西探偵／捕物 作家クラブ会報』 戦後占領期の大衆文化』（2023年8月～2024年2月、金沢文園閣）

占領期から冷戦期にかけての手塚治虫と宝塚歌劇の関係をジャンル横断的に分析し、以下のエッセイを発表した。「手塚治虫と宝塚 幻想の相乗効果：『ヴェニス商人』から『ブラック・ジャック』まで」『図書』2023年5月号、2-7頁

共立女子大学舞台芸術コースの招待で、以下の講演を行い、講演原稿が刊行された。宝塚歌劇における「いのち」の表現：柴田侑宏、正塚晴彦から上田久美子まで

川崎 賢子、華雪りら（ゲスト）『文學藝術』（45）85-119頁、2024-01-16、機関リポジトリ掲載 <https://kyoritsu.repo.nii.ac.jp/records/2000126>

- (5) 以上、国際学会、国際ワークショップにおける発表、論文発表を通じて、冷戦期日本文学文化についての研究者のネットワーク構築にも成果を上げることができた。次の段階に繋ぐことが可能になったといえる。大岡昇平、安岡章太郎などの文化冷戦期日本文学のカノンと呼べるような小説家の研究に加えて、石坂洋次郎、松本清張、江戸川乱歩ら、大衆文学作家、探偵小説ジャンルの作家についての研究にも冷戦期という歴史的な視角を導入することができた。探偵小説ジャンルの媒体である雑誌『宝石』、作家資料である『関西探偵作家クラブ会報』の研究にも関わった。映画、演劇、漫画などのジャンルを横断して、冷戦期の表象の越境やアダプテーションについても考察した。また、南博研究を通じて、日本のモダニズムの1920年代から冷戦期にかけての歴史的変容について、モダニズム言説に対する占領期後期（冷戦期初期）の検閲について、さらには、GHQ占領期前半から後半への移行に伴う検閲の変容について、考察を深めることができたのは、大きな成果であった。

- (6) 今後の課題として、冷戦期日本文学におけるポストコロナル言説および表象の研究、冷戦期日本文学におけるミクロの政治としての家族、ジェンダー、セクシュアリティの研究の一層の深化が必要となる。この視点は、冷戦期／高度経済成長期を俯瞰するものであり、既存の近代日本文学史研究の洗い直しという波及効果が期待される。また米国の広報外交と日本文学・日本文化との交渉、葛藤の研究は、政治学、比較文学比較文化などとの学際的な研究としての可能性を持っている。米国の広報外交と日本文学の「国際化」の関係は、日米二国間関係のみを前提条件としているわけではない。文化冷戦期における東アジアの状況の中に日本近代文学を位置づけ直すというマトリックスも要請される。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Kenko Kawasaki and Laura Clark	4. 巻 42
2. 論文標題 Girls (and Boys) Debating Democracy in Aoi sanmyaku	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Japanese Studies	6. 最初と最後の頁 309-322
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/10371397.2022.2134100	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 川崎賢子	4. 巻 24
2. 論文標題 占領期の南博 プラング文庫資料を中心に	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Intelligence	6. 最初と最後の頁 30-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 5件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 川崎賢子
2. 発表標題 戦後GHQ占領期から冷戦期にかけての「大衆文学」研究の現状と課題（久生十蘭から松本清張まで）
3. 学会等名 RELIJAM（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 川崎賢子
2. 発表標題 A Detective with 'Mixed-blood' Looks: Transformation of the Detective Genre as a Transcultural Text, from the 1920s to the 1940s
3. 学会等名 European Association for Japanese Studies（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川崎賢子
2. 発表標題 Shotaro Yasuoka's " View by the Sea " Transformation of Mother and Father : Aging and Animalization
3. 学会等名 Japanese Studies Association of Australia ( 国際学会 )
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 川崎賢子 ( 分担執筆 ) 石川巧・飯田祐子・小平麻衣子・金子明雄・日比嘉高共編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 文学研究の扉をひらく 基礎と発展	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>日本文学研究の現在と世界の視野  <a href="http://www.inalco.fr/evenement/journees-etude-litterature-japonaise-relijam">http://www.inalco.fr/evenement/journees-etude-litterature-japonaise-relijam</a>          20世紀メディア研究所 ( 早稲田大学 )  <a href="https://www.waseda.jp/prj-m20th/">https://www.waseda.jp/prj-m20th/</a></p>
---

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------